



第三回国連教育シンポジウム

「国連をどう教えるか」

主催 国連広報センター
日時 一九九三年七月三十一日
場所 国民會館

第三回国連教育シンポジウムの開催にあたって

国連広報センター所長
ミアン・カドルディン

大都市、大阪での第三回国連教育シンポジウムを開催するのにあたり、多大なご助力をいただきました大阪府、大阪府教育委員会、大阪府国際交流財団に感謝の意を表させていただきます。

この国連教育シンポジウムの開催は今回で三回目になりますが、東京以外の地で開催するのは初めてであります。

冷戦後、国際関係における国連の役割が世界の情報メディアにおける興味と関心の中心になったことに、もはや異議をはさむものはいないでしょう。この点に日本も国際社会の主要なメンバーであり、例外ではありません。私は数年間、日本で暮らしていますが、国連の将来の役割に関する日本の皆さんの関心は他の多くの国よりも高いと実感しております。国連広報センターは日本における国連の代表部として、国連活動について日本の皆様により明確な、そして正確な情報に基づいた認識を持っていただくことが最大の任務であると考えています。この目的を達成するための最善の手段は、教育機関、特にこの問題について若い世代を教えることに直接かかわっておられる方々にできるだけ多くの情報を提供させていただくことであると思っております。

この広範な目的を達成しようと、私たちは教育機関における国連教育の現状と今後、さらに何ができるのかに関して意見交換を行うため、この問題にさまざまな側面から取り組んでいらっしゃる皆様に一堂に集まっていたいただきました。過去に東京で行われた二回のシンポジウムは教師、教科書編集者、その他の専門家にお集まりいただきましたが、そこで行われた討論は、すべての参加者にとって非常に有意義なものでありました。そして東京において行ったシンポジウムの経験を生かして、今回、大阪で行おうと決意した次第です。

国連は複雑な機関ですが、世界の政治的、経済的並びに社会的状況を見れば、多国間外交への関心が必要なことは明らかです。今日、行われるシンポジウムは人権問題に焦点を当てるも

の ですが、特に教育分野の観点において、国連の活動についての最新情報の入手と、国連の理解の一層の明確化に貢献するものと確信しております。

「生きた国連を学ぶために・教えるために」

横田洋三・国際基督教大学教授

ただいまご紹介いただきました横田でございます。

生きた国連をどう教えるか、何を教えるかということにつきまして、私の考えているところをお話しさせていただきたいと思えます。後ほど質問の時間をとらせていただきますので、いろいろ、みなさんの方から疑問点、あるいはご経験から出てくるご意見などがわけていただけますと大変有り難いと思えます。

このような形で国連広報センターが国連をより良く、より正確に日本のみなさんに知っていただくための努力を始められたということを大変嬉しく思っております。その一環として、三回目のこの集まりに講演者としてお招きいただいたことを大変光栄に思っております。

私自身も日常的に、大学で国連に関心を持つ学生に、国連について講義をしたり、あるいは問題を提起したりということをやってきましたので、私が教える学生が例えば高校時代、中学時代に国連についてどういうことを学んできたか、それから現在の大学生が国連についてどういう知識を持ち、またどういう関心を持っているのか、それから一般の社会の人たちが国連についてどういう知識を持ち、どういう関心を持っているのか、というようなことを知る機会を持つことが出来たということは大変私にとっても嬉しいことです。

もう一つ、私自身国連をひとつの研究テーマとして、これまで勉強してまいりましたが、同時に今、司会の方からご紹介いただきましたように、国連の差別防止少数者保護小委員会（人権小委員会）というところにも活動しております。国連というものに多少内部から関わる機会も状況の特別報告者としても活動しております。それからミャンマーという国の人権も持っております。そういった意味で私自身生きた国連というものを自分で体験して、これまで本とか、論文とか、新聞などでは知ることが出来なかった国連の姿というものを知ることができ、また、国連の重要な役割というものを知ることが出来て、この経験は私一人のものにしておくべきではなく、いろいろな人に知っていただいた方が良く思うようになりました。

同時にそういう経験を通して感じますことは、日本において国連に関する一般的な関心は強いのですけれども、実際の国連、生きた国連をどの程度正確にみなさんが知っているかという点、その辺がやや現実から離れた国連の理解をしているように思います。場合によると理想化した、あるいは間違った意味で失望感を持って国連を見るといって、そういう極端な評価もあるような気がします。そこで現実の国連、生きた国連、動いている国連、こういうものをもっと正確に知る機会を促進した方がいいというふうに私は考えておりました、そういう意味からも今日のこのような催し物は大変意味があると思っております。

最近、特に国連に関する関心が非常に強まって参りました。その理由を私なりに整理してみますと、五点ほど挙げられると思います。いずれも全体の一部を五点に分けたような感じがしております。五点は相互に関連しております。人によってはそのうちの一部に関心があり、他のことには関心がないという方もいらっしゃるかも知れません。いろいろつながったポイントですので、ひとつひとつが独立しているのとらえないでいただきたいと思っております。

まず第一は湾岸戦争という非常に多くの人の関心を集めた、そしてある意味では現在進行形で戦争というものをテレビの画像を通じて見た、人類が戦争というものを数多く体験してきた中で、戦争に直接関わらない人が現在進行形の戦争の姿をテレビを通じてお茶の間で見るといって、そういう経験をしたのはおそらく湾岸戦争が最初ではないかと私は思います。ベトナム戦争の時にも多少そういうことがありましたが、映像は使われませんでしたけれども、しかし、あれほどまでに現に進行している戦争が映像に映されるといことはなかつたらうと思っております。

これで日本だけではなく、世界中の人が湾岸戦争について考えさせられ、その中でひとつの重要な役割を果たした国連というものを考える機会を持ったのだらうと思っております。そして、それに続く様々な世界各地の紛争に派遣される国連の平和維持軍、平和維持活動、カンボジア、ソマリア、あるいは旧ユーゴスラビア、アンゴラなどに派遣されている国連の平和維持活動に対しても、マスコミが大きく報道するところなんだろう、安全保障理事会というのは何なんだろう、という一般的な関心が強まってきたと思っております。

それに関連して、第二に、国連の平和維持活動について、日本がどういうふうに関与するかという、今度は日本の政策の問題、さらには日本国憲法第九条の制約の問題、これが出て参りました、ある意味で日本の国内の政治論議の的にもなったわけですね。従いまして、よそで起こ

つている出来事について関心が集まっただけではなくて、我々の問題としても国連というものを理解し直さなければならぬ、そういう状況に立ち至ったと思います。

しかし、この時点においても、実は日本での論議は国連というものを正確にとらえての論議ではなくて、非常に抽象的にとらえて、ただ日本が国連にどう貢献するか、自衛隊を参加させることが憲法九条の規定からいって、あるいは憲法の精神からいっていいかどうかという、そういうレベルの議論であり、どういう性格の国連軍なのか、どういう性格の国連の活動だったか、日本の自衛隊も参加していいのかわからないのかという、国連の活動そのものに対する議論というものは全くなかったと思います。

日本の国会の議論でも、国連がどういう活動に参加していいのかわからないのか、カンボジアに国連カンボジア暫定統治機構（UNTAC）のような形で参加するのがいいのかわからないのか、湾岸戦争のような形で国連自身は軍を派遣しないけれども、多国籍軍という形で別の軍事行動をただ国連は許可する、という形で関与することに意義があるのかどうか、そういうレベルでの議論というのは日本ではほとんどなかったと思います。従って国連の実情、国連の姿というものを正確に日本で映し出す場面というのは、これだけ国連に関する関心がありながらも決して多くはなかったと思います。

いずれにしてもそういう形で日本が絡みましたので、国連に対する関心が強まったと思います。

それから三番目にはUNTACの事務総長特別代表が日本人の明石康さんという、これは大変立派な国連職員でいらっしやるわけですが、この方がそういう地位につかれて新聞などで報道されるようになったということ。それからもう一人、緒方貞子さんというこれもまた立派な女性外交官、その前には学者でいらしたわけですが、個人的なことですが、私は緒方貞子先生と一時期ですが、国際基督教大学と一緒に教員として務めさせていただいたことがあります、この大変立派な方とある時期同僚であったということを、私は光栄に思っておりますが、その緒方貞子先生が国連難民高等弁務官、国連職員の中でも最も尊敬される地位のひとつについておられます。

しかも緒方先生はただ単にその地位が高いというだけではなく、その地位を非常に立派にこなしておられ、新聞報道などでみなさんもよくご存知と思いますが、その高い評価は決して誇張ではなくていろいろなところから私の耳に入って参ります。こういう緒方先生、明石先生と

いう方たちの活動ぶりを、新聞等で、あるいはテレビ等で日本の方が見て、国連というもの
身近な印象を持つようになったということは確かにあるだろうと思います。

第四に、日本がこういうふうな経済的な大国になって国際的な貢献というものが言われるよ
うになりますと、当然、国連の中で日本がどういう地位にあるのかということが、関心の的に
なって参ります。特に日本政府は、しばらく前から、日本もこれだけ国連の中で重要な役割を
果たすようになったので、そろそろ安全保障理事会の中で常任理事国の地位を認められてもい
いのではないかと、それを強く主張するところまでは行きませんが、そのような考え
方を随所で出すようになりまして、その辺で国連の中での日本の位置付けがやはり関心の的
になってきていると思います。

それから、最後の点として国連とは直線関係がなかったのですけれども、人権の問題とか、
環境の問題、それから開発の問題に対して、日本の人たちの関心が強くなって参りました。そ
こで、それらの問題をどうやって解決していくのかということと考えると、結局行き当たると
ころは、日本だけで環境の問題を解決しようと思っても全然解決できない。日本海がだんだん
汚染されているという問題は、日本だけでは解決が出来ない。お隣の中国とか北朝鮮（朝鮮民
主主義人民共和国）、大韓民国あるいはロシア、こういう環日本海の国々の協力なくしては、
日本海の汚染というものは解決できない問題になったという事情があります。

こういう問題が、実は日本海だけでなく、海全体の汚染の問題、あるいは空気全体の汚染の
問題、あるいはオゾン層の破壊の問題となつて、環境問題を日本一國で解決することは出来な
いという認識が生まれました。日本の周辺の国との協力だけで解決することもできない。結局、
国連というような世界的な機構を通じてしか問題が解決できないのではないかと、いうところ
にぶちあたるわけですね。そうしますと環境問題に関心を持って活動していた日本のNGOの
方々は、結局行き着くところは国連になる。去年開かれたリオデジャネイロの国連環境開発会
議（地球サミット）では、やはり、そういう場で発言をし、影響力を発揮するようにならな
ければいけないということ、日本の環境団体は理解するようになってきたと思います。

人権の問題も同じでして、最初はローカルな日本の人権の問題として出発した活動が、結局
行き着くところは国連の人権委員会なり、あるいは私が出ております差別防止少数者保護小委
員会という長い名前の委員会、これは人権小委員会と普通言っておりますが、この委員会に持
っていった議論してもらわないとだめだ、ということですね、人権の問題も環境の問題も、

そして開発援助の問題も、安全保障の問題もいずれをとってみても、国連を中心に考えざるを得ないという時代に入ってきていると言えます。

このような事情から、おそらく日本では国連に対する関心が非常に高まってきたと思います。もうひとつですね、新聞とか、論文、本などにはなかなか書かれないことなのですけれども、私がひしひしと感じますのは、若い人の中に漠然とながら、将来国連のようなどころで働いて国際社会に役立つ仕事がしたいというような希望を持っている人が非常に多いということです。これは潜在的に言いますと非常に多いと思います。こういう人たちが国連についてもう少し知っておきたいという関心を持って国連を見るようになったということも言えると思います。

これも、国連の問題が新聞などジャーナリズムで取り上げられるようになり、また明石さんや緒方さんのような日本人で国連で活躍する人が出て来た結果として、自分も将来そういう人になるかならないかは別にして、そういう分野で仕事をしてみたいということを思う若者が出て来ているということだろうと思います。私はこういう傾向はやはり、良いことであるし、我々の立場からしますと真剣に受け止めてその人たちの関心が将来ずっと持ち続けられるように、そして、そのうちの何人かの人はその目標なり、理想が実現できるように、そういう道筋を明らかにすることを努めなければいけないというように感じております。

そうしますと具体的に国連について、その人たちはどういうことを知りたがっているかが次に問題となるわけです。

国連について何を教えるか、またどのように教えるかと言うことを考える場合においても、どういう人たちが何を知りたがっているかということがわかりませんと、対策の練りようがないわけですね。まず一般的に言えることは、国連に関する基礎知識です。当たり前のことですけれども、国連がいつ出来て、どういう機構で、それぞれの機関、安全保障理事会なり、総会なりがどういう構成で、どういう権限を持っていて、どういう活動をしているのか、あるいは国連の中の難民高等弁務官という緒方先生がやっておられるような仕事は、具体的にどういう仕事をしているのか、というようなことですね。

これは、例えば国連広報センターが出しています「国際連合の基礎知識」というような本の中に詳しく書いてありますし、非常に簡単になったもので、今日みなさんのお手元に配られた「国連とは」という小冊子の中にも書かれておりますね。これはいずれも、私共の目から見ま

すとよくまとめられた、わかりやすい。写真も入っていてですね、わかりやすいんですけども、私が日常的に学生と接したり、あるいは若い人たちと接して感じることは、こういういい出版物が沢山あるのですけれども、ほとんどの人は全部それを見ると言うことをしてないのです。

それから、一般の人で新聞を読んでいる人たちなどは、まず、こういうものを見る機会もないでしょうし、かりに持っていたとしても、全部読むことはしていません。これは考えてみると当たり前なので、国連広報センターもいろいろ努力して、みなさんに楽しく読んでいただけるようにと、映像を入れたり、写真を入れたり、今お手元に配られている「国連について考える」というのでは「演習例」といって問題が出ておりました、国連について調べてみましょうということでは非常に工夫して書いていますね。

こういう努力をしてらっしゃるんですが、実際には国連のことを知りたいという関心を持っている人が、これを見て、「演習例」まで全部やるかというところ、現実にはそこまでやる人はほとんど私の知る限りいないですね。結局こういうものを、大学なら大学の講義、高等学校なら高等学校の授業で、副読本なり、教材として使いながら、ある種のダイナミックなプロセスの中で効果的に使っていきますと、非常に生きますけれども、これをただ手渡して、高校生の関心のある人に、どうぞこれ読んで演習問題やってみてください、と言っていると、これは多分やらないと思います。試験があるなんていうと、一生懸命やるのかも知れませんが、そういうことがない限り、まずやらないのですね。

私もまた、大学で国連のことを講義していきまして、こういうものを学生に読ませようと言う時に、どうしたらいいかと考えまして、後で少し具体的な例を挙げて説明をしますけれども、読ませ方とかそういうことをいろいろ苦労しました。

いづれにしても、知識としては持っているだけのことなわけです。例えば「国際連合の基礎知識」というのは、始めから終りまで通して全部読むことはまずありません。いらないもかわらず、あれは大事なもののですね。私自身はこのように位置付けているのです。つまり、これはある種の百科事典、あるいは辞書みたいなものだという事です。

辞書とか、百科事典をA、B、Cという順番に全部読んでいって、記憶しようとか、覚えようなんて思う人はいないわけです。それは、必要に応じて、安全保障理事会ってなんだろうと、

新聞を見たときに手元にあつて、ぱつと見ると、ああそうかと、一五カ国で構成され、そのうち五カ国が常任理事国で、その国はどういう国でということが出てきて、そのところだけを見る。そのときに具体的な、自分が知りたいと思つた事件との関係で、安全保障理事会の知識を入れるということです。

また総会についての知識があまりないとします。ところが、しばらくして安全保障理事会では話がうまく行かないので、総会に話を持っていかれたときに、総会と安全保障理事会とはどういふ関係にあるのかなという疑問が出てきます。そこで今度は総会を見てみると、ああそうか、総会って言うのは全加盟国で構成している大きな機関なのだなあ、大体九月頃から三カ月くらいニューヨークで開かれるものなのだなあということがわかるわけですね。だんだんそういうふうにして理解が深まっていくものであり、これを読んで、総会がどういう組織であつて、どういふ権限を持つていて、いつごろ開かれて、安全保障理事会との関係がどうで、ということとを抽象的に覚えていく作業をするのは、極めて苦痛であつて多分普通はやりません。

試験で強制的に読まされない限りはやりません。では試験をしたらいいかというですね、私の経験からいふと試験で覚えた知識というものはあまり役に立ちません。本当をいうと、そういうにわか仕込みの知識は身に付かないで試験が終わつたとたんに半分以上忘れれます。一年たつとほとんど忘れれます。そういう意味でこれを試験でやつて覚えさせてもあまり意味がない。そういうことで、これをどういふふうに効果的に読ませるかということが、苦勞のポイントになつてくるわけです。このことについては、後程少し触れたいと思います。

それからもうひとつ一般の人が知りがつてゐることは、日本の国連政策についてです。日本と国連との関わりがどうなつてゐるのか、また日本がどのくらい国連に貢献してゐるのか、それから今後どうしていったらいいのか、といったようなことについて一般の人は知りがつてゐます。これだけ国際化ということがいわれて、日本人の生活も、今まで自分達の生活をよくすることに必死であつたのですけれども、今になつて見ますと世界にはもつと困つてゐる人たちが沢山いる。その中で日本というのは非常に恵まれた国だということがわかつてきました。

そこで、例えば湾岸戦争なり、カンボジアのPKOなりで日本が貢献するということになると、とたんに憲法九条の問題が出て来て、出来るのか出来ないのかわからない、そういう議論をしてるうちに世界の方はどんどん動いていって、PKO活動は始まつてしまふ。日本がこんなところまで立ち止まつていいのかというような関心が、当然国民の間に出て来てゐるわけ

すね。その辺についてもう少し明確な知識と、それから政策を議論する上で必要なオプシオンですね、どれを選べるのかということについて、もう少し正確に知りたいという要求があるのだらうと思います。

それからもうひとつ、国連の性格と言う問題があります。要するに国連とは一体何なのか。国家を超える世界政府のようなものなのか、大国のいいなりになる外交政策の道具のひとつなのだらうか。日本についていえば、日本にとって都合の良い時は利用し、都合の悪い時には国連なんて無視すればよい、そういう存在なのだらうか。いったい国連って何なんだらう。そういうところを、やはり、多くの人たちは知りたがっています。実はこの問題は非常に難しい問題なのです。学者の間でも答は出ておりません。世界政府ではないということは、これはもう大体一致しているのですけれども、世界政府ではないということは国が中心になっているわけですから、国連は、国の、加盟国の下に来るものなのか。加盟国のいう通りに動くだけのものなのか。それだったら、議論は日本の国内だけでしていればいいわけであって、国連のことをあまり考えなくても、国連に何をさせるかは、日本の都合で決めればいいわけですね。

ところが、実際はそうではない。日本にとって国連というのは無視できない、しかも日本の意思通りに動くところではありません。日本にとって国連というのは無視できない、しかも日本の組織ですし、中には日本よりも発言権の強い国もありますから、特に五大国の発言権は強いのですから、そうになると、国連の意思決定というものは日本の意思通りには決まらないですね。そこで決まったことが、日本に対して世界政府のような形で押し付けられるとしたら、それはいったい何なのか。

日本とどういうふうに関係してくるのか、国連とは何かということが非常に難しい問題になってくるわけです。それは難しい問題ですという答を出しておけば一応、普通は済むのですけれども、私は言いつ放しはよくないと思っています。そこで少し私なりの答をその部分について出しておきますと、国連というのは世界政府ではありません。それから単なる会議場でもありません。それから、国連というのは国家の従属物でもありません。国連というのは加盟国が作った、加盟国の総意に基づく、したがって個々の加盟国とは違うのですが、加盟国の総意に基づいて、国際的に課せられた任務、平和の維持とか人権とか開発ですね、そういう問題について国連独自の立場でもって、解決しようとする機構だと思っています。

こういう言い方をしますとまた抽象的になってしまふのですが、では、日本との関係は何か

といいますが、日本は国連に対しては、一加盟国としての日本の国の地位にふさわしい発言権を持つてゐる場所です。ですから、国連の意思形成に對しまして日本は分相応の発言を認められてゐますし、また、なすべきなのですね。ですから、国連の意思形成に日本は一〇〇パーセント影響力を与えることは出来ませんが、ゼロでもないんです。どのくらいでしょうか。あまり正確にいえませんが、ごくおおよっぱにいえば一〇パーセントなり、一五パーセントくらいの影響力のある国に日本はなつてゐると思ひますが、そういう形で国連の意思形成に影響力を与えられる国です。

そうなつてきますと、実は湾岸戦争の時もそうだし、カンボジアの時もそうですけれども、国連が何かをするという時に日本は、五パーセント、一〇パーセント、一五パーセントくらい影響力を与えられる国として、日本は国連の意思形成にどう意見を述べていくかということ、日本の中で議論しなくてはいけないんです、本當をいいますと。ところがその議論というのは日本では全くないんですね。このへんに現実の国連の姿と日本での議論との間のギャップがあると私は感じるわけです。

いづれにしても、国連は日本が影響を与えられるところである。けれども、国連の意思形成は日本の一存では決まりません。ほとんどのことは日本の思い通りにはなりません。けれどもある種の影響力を持っています。それは他の国も同じです。どの国も日本と同じように自分の国の意見が一〇〇パーセント反映できないとフラストレーションを感じていますが、しかし他方で国連での議論の中で一〇パーセントなり、一五パーセントの参加をすることによつて日本のある種の影響力が国連の意思形成に發揮できるということはいえるわけです。

国連で決まつたことというのはどうなるのか。ここは世界政府ではありませんから、日本に對して上から高圧的に来るものではありません。しかし無視出来るものでもありません。というのは、日本が参加して決まつたことであり、日本は国連の加盟国ですから、国連の決めたことに対して協力する義務があります。ただ協力の仕方にはいろんな仕方があります。一般論からいうと、日本国憲法や日本の基本的な利害とぶつからない範囲において、日本の国内の事情を尊重しつつ、国連に協力する。その辺の關係は非常に微妙なんですけれども、無視は出来な

いと思ひます。そして出来るだけ協力する義務がある、だけど世界政府ではない、こういう形のものとして、国連は現在存在してゐると思ひます。こういうふうにいいますと、何か他人ごとのように見え

ますけれども、そうではなくて、日本が世界において実現したいことの多くは、国連を通さないと実現できなくなっています。例えば環境の問題で、日本が世界の環境というものを良くしていきたい、あるいは日本海の環境でもいいのですが、海の汚染を防止するために、日本が何かやっていたいと思う時には、国連の場を使わざるを得ないのですね。

そういう形で日本は国連を使っていくことも出来るわけです。ですけども、日本の意見だけで決まるところではない。他の国の意見も入れながら、要するに国際社会の総意に基づいて国連を動かしていく、そういうところなんです。こういうものとして国連を見ていかなければいけないんだらうと思います。国連の性格というのはそういうものであって、世界政府か、あるいは日本に従属するものか、日本に無関係なものか、このどれも実は正確なとらえ方ではないのです。国連は、日本と深くかかわりあい、日本の長期的な利益実現のためには無視することとは出来ない、けれども国連で決まったことが自動的に日本に押し付けられるものでもないという、深いかかわりがありつつも、ある種の距離があるという、そういう存在として国連を受け入れなければいけないと思います。

もうひとつ、これは違った性格の問題なんですけれども、先ほどもいいましたように、若い人の中に国連職員に将来になりたいという漠然とした希望を持っている人が増えています。若い人といいますが、潜在的には中学生、高校生くらいからそういう関心を持っている人がかなりおります。しかし、その後英語が得意ではないからとあきらめる人が沢山出て来るんですが、英語が出来ないと国連職員になれないというのは、これはちよつと国連に対する理解が間違っていると思います。確かに実際に使われている外国語としては、英語が国連では一番重要ですから、やはり英語は使えないといけないんですけれども、それは中学校、高校ぐらいで英語が出来ないからあきらめるといふ問題ではなく、いくらでもその後挽回できるんですね。

私自身も中学の時は実はあまり英語は得意ではなかったんです。ですが、将来、国際的な仕事をしたいなと思ひまして、高校に入ってから少し英語をがんばって、その後から少しずつ英語は良くなってきたんですが、中学の時にあきらめてしまっていたら、今のような仕事は出来なかつただらうと思います。ですから、中学生の方、今ここにはいらつしやいませんが、みなさんの知ってる人の中で、英語が出来ないんだけど国連で仕事したいという人がいたら、決してディスカレッズしないようにしていただきたいと思うのです。

英語は必要ではありません。非常に簡単にいってしまうと、国連の場においては、英語という

のはコミュニケーションの手段であり、技術です。ですから、それは自動車の運転免許と同じようにですね、ある訓練を受けて経験を積みますと、あるところまでは行けるんです。他の分野で非常に優れた人であれば、語学力は必ず身につきます。もっと大事なことは、国連のやっっていることに対して理解があり、関心を持ち、情熱を持ち、しかも、その特定の分野ですね、高度の知識と経験がある人、そういう人が求められてるんですね。

ですから決して若いうちにあきらめることがあってはいけません。今の日本の制度の下ですと英語が出来ないと国際的な活動は出来ないんじゃないかという先入観がありまして、その辺であきらめる人が出て来ていると思います。若い人といっても、大学生、実務経験を持っている人、実際に現在社会で働いている人の中にはまだ二〇代の人、それから三〇代の前半くらいまでの人の中には、国連職員になることを希望している人が増えてきています。

国連広報センターも関連していただくと思うんですが、今年の春にニューヨークの国連の人事部から数名の日本人職員が来まして、国連職員になるためのセミナーをやりました。予定としては最大限三〇〇人くらい集まるだろうということで場所を用意したんですけども、ひよっとしたら一〇〇人か一五〇人くらいしか来ないかもしれないっていたのです。ふたをあげてみましたら七〇〇人近く集まりました、三〇〇人の会場がびっしり埋まるという、そのくらい強い関心があるということがわかりました。その人たちの全てが国連に就職できるということではもちろんありませんし、国連に勤めることが適当でない人も集まったと思いますけれども、関心がそれだけあるということは無視できないことだと思えます。

その人たちが知りたいことは、もちろん国連がどういうことをしているのか、どういう仕事の機会があるのか、国連そのものを知りたいということだけではなくて、自分のキャリアとの関係の中で国連に関心を持っている。それから、より切実な問題は、国連に入るにはどうしたらいいか、どういう試験を受けるのか、どういう書類を用意したらいいのか、どういう大学でどういう分野を勉強したらいいのか、といったようなことについて非常に強い関心があるわけですね。

で、こういうことについても、私はやはり教えるべきだと思っています。今のところそういう分野についての知識は非常に断片的に、経験談的に、国連職員だった人によって語られたり、書かれたり、それが知りたい人にだけ何となく伝わるという感じで、広く一般に国連職員になるための準備というものが若いうちからなされるという状況にはありません。

その意味では情報が非常に片寄っておりませんので、たまたまですけれども、私が教えています国際基督教大学（ICU）のようところは、過去に沢山の卒業生が国連に勤務した経験がありますし、現在も卒業生がかなりそういうところで仕事をしておりますので、情報は入りやすいんですね。ほとんど毎年、何人か国連に勤務するっていう形になっていきます。しかし、私は一つの大学だけが国連に人を送るといのは望ましいことではなくて、いろんな大学から、あるいはいろんな分野から、国連職員が出てくるのが望ましいと思っておりますので、ぜひ皆さんの中でも個人的に関心のある方、それからみなさんの周りの人で関心のある方がいましたら、そういうことについても可能性があるということを知って、それなりの情報を知っておいた方がいいと思いますし、私は国連広報活動の一環としてそういう分野も、広報の中身のひとつとして加えていいのではないかと考えております。非常に簡単に言えば国連職員に関心を持っている人たちに対するセミナーのようなものをやるのも良いのではないかと思っています。

そこで国連について何を教えたら良いのかということになりますが、基本的には今私がいいましたようにみんなが知りたいと思っていることについて教えるということになるわけなんです。ただ大事なことは、ただ単に本に書いてあることを教える、覚えさせるということだけではほとんど意味がないということなんです。やはり、生きた国連、現実に動いている国連というものを教えていくことが大変重要だろうと思えます。動いている国連の中には、ただ単に国連というとすぐニューヨークの国連ビルを思い浮かべるわけですが、まあそこが中心であることは確かですが、国連というのは世界各地にあって非常に身近に存在しているものでもあるわけです。

日本の場合には国連広報センターが東京にあります。大阪から見ると国連というのは遠いところのように見えますけれども、それでも大阪にもまもなく人権関係のアジア・太平洋人権情報センターができるわけですね。国連というのは身近な存在になりつつあります。特に開発途上国に行きますと、国連というのは非常に大きな存在です。国連の開発計画、通称UNDPといますけれども、これが国連として、開発途上国の人々の日常生活に直接関わるような仕事をしております。みなさんも聞いたことがあると思いますが、ユニセフ（国連児童基金）という組織がありますが、これも国連の組織ですね。

みなさんには、ユニセフカードとか、募金活動でなじみがあるかも知れませんが、みなさん

の中に、そういうボランティア活動をしている人もいらっしやるかも知れません。そこで集められたお金は世界の各地の子供を中心にした事業にいろんな形で使われているのです。したがって「ユニセフ」という言葉は途上国に行きますと子供たちはみんな知っている言葉ということになるわけです。

このように国連は非常に身近な存在にもなっているわけです。その生きた国連を知ってもらうことが必要だろうと思います。ですから国連というところからニューヨークの国際会議場だけを思い浮かべるのではなくて、これは間違いではないのですけれども、ごく一部を知ったにすぎないんです。国連職員の中には背広なんか持っていないで、昔の「ターザン」という映画がありましたけれども、アフリカの奥地です、冒険服を着て汗水流して働いている国連職員が沢山いるわけですね。現地の人たちと接触しながら、いろいろな病気の危険や、その他事故の危険などを冒しながらも、現地の人たちの生活の向上のために働いている国連職員も沢山おられます。

日本人の職員の中にもそういう人が沢山おられます。女性の中にもそういう人が沢山おられます。本当に頭が下がるような立派な仕事をしている人たちが多勢おられますので、そういう生きた国連というのを我々は知る必要があるのだと思います。もうひとつ、今申し上げたことの中でユニセフとUNDPを挙げましたけれども、国連の関係機関の中にはおそらく数十、あるいは一〇〇くらいいろんな機関があります。みなさんの知っている名前だけ挙げてみましても、専門機関まで含めるとユネスコとか世界銀行、ILO（国際労働機関）、IMF（国際通貨基金）あるいは東京に本部のある国連大学ですね。国連の機関というのは沢山あります。これらいろいろの形で活動していますので、国連を知るためにはこういう関連機関についてもやはりきちんとしておく必要があるわけです。

それから、もうひとつ国連について正確に知るためには、先ほど国連の性格ということを行いましたけれども、国連の場というものがどういう場かということを知る必要があります。日本という国は、本当は単一民族ではないのですけれども、概ね単一民族のように見られています。実際はそうではなく、例えばアイヌの人たちなどがあるわけですが、しかし概ね日本語を話すと通用しますし、大体のことは日本人同士だと共通の行動規範があり、共通の知識を持っていて、共通の価値観で行動していますから、そのような国から見ますと国連のような場が理解しにくい、想像しにくいのです。国連というのはある意味において日本のような社会

と正反対ですね、集まってくる人がみんな宗教は違う、文化は違う、それからものの考え方
も違う、言語も違う、というところですよ。

そこで一緒に仕事をするわけですよ。みなさんの中には最近、例えば高等学校などで外国人の
先生を採用して一緒に仕事をしているところもあるかと思いますが、そうなりますと、少しず
つ違った考え方の人間が入ってきまして、調整のためのいろいろな作業をすることが出てきて
いると思います。私の勤めております国際基督教大学も、教員の四分の一が外国人ですので、
私自身も価値観の違いの中で仕事をするということを体験しておりますが、そういうのと比べ
ても国連というのはもっと多様性のあるところですよ。国連においてはどのグループをとってみ
ても圧倒的多数というのはいないですね。今度日本で非自民の八党派ですか、連合政府をつく
るっていうんでうまくいくかどうかどうかなんて新聞に書いてありますが、八党派くらいでま
たことが出来ないとしたら、国連はともまとも出来ないとはいえずです。もう八なんてものじ
やないですね、六〇、七〇、八〇くらいのはらばらなところですよ。

それが、なんとかスペイン語を話す国のグループが集まったり、イスラム教国が集まってみ
たりして、細かく見るとイスラム教国の中も仲が悪くてなかなかまとまらない、自民党の派閥
の状況とか日本の政治のばらばらな状態よりはるかにばらばらですね。

で、そういう状況を考えた時に国連がこれまでやってきた仕事というのはかなりの成果だと
私は思うのです。とにかく、最後にはコンセンサスです、リオデジャネイロでも、開発と
環境という非常に難しい問題についてリオ宣言を採択しましたし、行動計画も採択しました。
今年六月にはウィーンで世界人権会議を開いて、これも非常に難しい意見の対立があったわけ
ですけれども、なんとか筋の通った宣言がコンセンサスで採択された。こういうことが行える
ということは、実は大変なことだと思います。確かにその後の実行のところ、国連は非常に
難しい問題を抱えておりますが。

けれども、国連というものが、それだけ多様なバックグラウンドを背景にして作られている組
織だということを考えれば、日本ではある組織が効率的に動くから、国連でも動かないのはお
かしい、国連はスムーズに動かないから非能率的だ、とそう簡単な批判は出来ないのですね。
大体国連には六カ国の公用語があります。六カ国語に全部訳されていくわけです。ひとつの会
議をとってみても、誤解は生じますし、文書もなかなか出て来ない。日本だったら翌日には前
日の議事録が出て来るのに、国連だとなかなか出て来ない。しかし、前日話したことを全部翻

訳してですね、六カ国語で文書を作るといふことは、これは大変な作業です。

そういうことを国連は現実にやってるんです。これは大変な作業で、しかも良くやっているとあります。ですから、多少の誤解が出て来たり、多少の意見の違いで審議が長引いたり、これはもう当たり前といいますか、その中でよくまとまった結論を出して来てるなっていうのが私の考えです。そういうふうに関連というものを実際の姿で見ると、国連に対する理解が非常に変わって来るだろうと思います。

ところで、国連の關係諸機関の中には政府の代表が作っている機関の他に、私が代理委員として出ております人権小委員会のように政府代表ではない専門家によって構成されているものもあります。したがって私は政府とは違った意見を述べているわけなんですけれども、同じように今度は全く政府とも専門家とも違う非政府機関（NGO）、民間団体の人たちも国連の審議に参加することがしばしばあります。特に人権・環境・開発、それに軍縮の問題については、NGOが最近是非常に重要な役割を果たしてきておりますので、そういう点も含めて、国連について教える場合にNGOの役割ということについても教えていく必要があると思います。

ですから教える内容は非常に幅広いです。これを高等学校の現代社会あるいは中学の公民などで数時間で教える、あるいはこういったセミナーで教える：一回か二回のセミナーで全部やるということも不可能ですね。大学の国際連合論、あるいは私がやっています国際機構論などでも全部をカバーすることは不可能です。で、どういうふうに教えるのかということになりますけれども、二、三、私の経験をお話しして、今日の話締めくくりたいと思います。

まず、知識をこういふ本を全部読ませて教え込むっていうことはこれは不可能なんです。大事なことは、学生なり、生徒なりが関心を持って主体的に調べて覚えようとする動機付けです。例えばですね、私が「国際連合の基礎知識」を学生に配布していますけれども、これを読ませる時にいくつかのクイズを出すわけですね。それもなるべく学生が面白がるクイズがいいんですが、例えば一九六五年に安全保障理事会が一一から一五に理事国数が増えたんですが、それはどうしてでしょうか、と質問します。そうすると学生は、はじめから読む必要はないんですが、安全保障理事会がどういふものか知る必要があるんで安全保障理事会の部分を読ませるといふことになります。

その上で、他のところで何かヒントになるものはないかなと見ていくうちにですね、六〇年

代にアジア・アフリカの新興独立諸国が多数国連に入り、安全保障理事会がそれまで西欧中心の構成になっていたことに対してアジア・アフリカの意見を反映するようなものにして欲しいという圧力が高まり、一から一五に増えたということがわかります。

このようにクイズの問題を幾つか出して、学生にはその答をさがすような形で読ませるといふことがひとつ考えられると思います。それから広報センターの資料の中にビデオのリストがあります。ビデオ教材の適当なのを選んで見せます。ビデオは比較的、映像と音と内容がありますので学生は興味を持って見ます。ただ受け身的に見るだけではあまり多くのことを学べません。そこで、これもビデオの中にある幾つかの問題をビデオを見たら答がさがせるようにしておいて、生徒なり、学生なりにはその答をさがすように見なさいといって五問くらい問題を渡しておくと思います。

そして、その答を後でみんなに出させて、それについて先生がコメントするなり、学生や生徒の間で議論をさせるという形式をとることが出来ます。私が一度使ったのはですね、大学の先生ですけれども、政治の専門家、経済の専門家、それから社会学の専門家、法律の専門家の人と呼んでおいてですね、学生と一緒にビデオを見せるんです。例えばアフリカの開発問題か何かについてのビデオです。そしてビデオを見たあとでそれについて四人のそれぞれの専門家から、政治の先生がどう見たか、経済の先生がそれをどう見たかというのを分析させるんです。そうすると同じビデオが全然専門分野によって違って見えるんですね。その後、その四人の先生に一〇分ずつ話をしてもらったあとで、今度は同じひとつの問題について四人の先生が、どう違ったとらえ方をしているのかを聞くということをやったことがあります。これも学生は興味を持って聞いて、効果的だったと思います。

そういう形で、ビデオもただ見せて終わるのではなくて、いろいろな使い方があるのだろうと思います。それからデイベート形式を取り入れたやり方もあると思います。この場合には例えば安全保障理事会の常任理事国に日本がなるべきかどうかを問題として、肯定、否定に分かれて五人なら五人ずつ、学生を指定してですね、あと十数人の聴衆の学生は評価表を持っていてその議論を聞いて肯定、否定のどちらの議論が説得力があったかを評価をさせるというようなことをやってもおきます。

それから、模擬国連方式、これは後でおそらくマクレガー先生が実際に使った例で話されると思いますので、私がやっていることは多少違うこともあると思いますが、パネルディスカッ

シヨンのところで少し私のやり方をコメントする形で補いたいと思います。

あと、ここには書かれてないのですが、国連職員になるためにどういうことをしたらいいかというこの実践をクラスでやったことがあるのです。どういうふうにやったかといいますと、二〇人くらいのクラスだったんですけど、ロールプレーなんですが、国連の開発計画の担当官を二人任命するんです。それから国連の人事課の人を二人任命するのです。で、あとの一六人はそれぞれ国籍を全部変えます。あなたはフランス人、あなたはドイツ人、あなたは日本人と、こう決めるのですね。

そうして国連の開発計画の担当者には、国連の公募説明書があるのですが、それを用意させます。「〇〇ポストが空きましたので募集します」といういわゆる公募の一枚の紙ですけれども。そのフォームを使ってあるポストの公募をするんです。このくらいのステイタスで、こういう能力がある、例えば経済の専門家とか学位は修士以上とか、博士号をもっている人とかそういうようなことを書かせるんです。給料はどのくらいとか書かせるんです。一六人の人が、その人がフランス人だと、なるべく自分が採用されやすいような条件を書く、国連職員になるための本を読んで、例えばパリ大学の経済学部を卒業しましたとか、その後、コロンビア大学に留学して博士号をとりましたとか、いろんなことを書くわけです。

作り事でいいんですけども、不可能なことを書いてはいけません。例えば二二才で博士号をとりましたとか、そういうことはあり得ませんから。なるべく現実的な、しかし自分がフランス人になり切ったつもりで、やるんです。学生によっては自分でフランス人の名前まで使ってフランス人になり切っている人もいましたけれども、そういう形で、アフリカからの人とか、女性とかいろいろのを入れて、人事課の人が中心になって、今度は採用のためのインタビュをみんなの前でやらせるのです。

ひとりひとり前に出てきまして、一〇分くらいでしようか、インタビュをするのです。国連への申請書にまず自分の経歴を書かせるわけですね。日本人ですと、例えば国際基督教大学を出てから、アメリカのハーバード大学で博士号をとりましたとか、そういつたことを書くわけです。その後、日本の海外経済協力基金に三年勤めて、国連に勤めたいと思います。勤める動機はこうですということを書かせる。それをもとにインタビュをさせて、それで一六人の中から一人を採用するんです。後で、採用を決めた人事課と国連の側の四人の人たちになぜこの人を選んだのかということコメントさせて、選ばれなかった他の人からいろいろ質問させ

るんですね。例えば自分はこういつていたのに、どうして考慮しなかったのですかと。

そういう形で採用ミツシヨンの実践を行い、少し採用を現実に経験させながら、なおかつ採用の基準とか条件とかそういうことを学生に勉強してもらおうということをやったこともあります。

要するに生きた国連を自分たちで体験するのを、そして興味をもって国連に関するいろんな資料を読ませる、という工夫を私なりにやっておりますが、どのくらい成果が上がっているか、まだ自信がありませんが、学生からの反応は比較的面白かった、ということと興味を持ってついてきてくれているという状況です。それから、その後国連に実際に勤めることになった人から、「あの時の模擬国連と人事採用のインタビューの経験は大変役に立った」といわれたこともあります。

どうもご静聴ありがとうございました。

「模擬国連を通して国連を学ぶ」

アンガス・マクレガー・京都西高等学校教師

国際連合に関する様々な活動がありますが、その中でも最も人気のある活動が、モデルUN、あるいはMUNと呼ばれる模擬国連です。基本的に言いますと、モデルUNは国連の総会、安全保障理事会、経済社会理事会、その他の委員会のシミュレーション、つまり模擬会議のロールプレイを行うことです。

このモデルUNは五〇年の歴史がありますが、現在、毎年、世界で一五〇もの模擬国連が二五カ国以上で開催されています。この中で最も大きなモデルUNは、毎年春、ニューヨークで開催され、実際の国連施設を利用して、二〇〇〇人の高校生が集まり、世界の諸問題について意見をかわし、議論を展開させます。

日本では現在、大きく分けて三つのタイプのモデルUNがあります。一つは、日本の大学のモデルUN、二つ目は、文部省に認可されていないインターナショナルスクール、そして三つ目は、京都西高校で開催されています。英語を外国語として学んでいる日本人高校生を対象にしている模擬国連という意味では、京都モデルUNが唯一のものと言えましょう。

モデルUNの目的は、国連で実際に行われている会議に、できるだけそって模擬国連会議を行うことです。会議に参加する生徒は世界各国の国連大使の役を演じ、世界における多くの複雑な問題について、討論し、互いに議論をかわし、解決策をねっていきます。参加者は、世界のリーダー、各国の代表者の立場から、実際に直面するさまざまな問題に取り組むことが要求されます。

モデルUNは、生徒に世界の政治機構を直接シミュレーションして、体験する機会を提供します。生徒は、自分たちの国籍とは関係なく、与えられたそれぞれの国の代表者を演じ、討論に参加しなければなりません。ここで重要なことは、(1)代表する国の外交官の役割を果たすこと、(2)代表国の方針を説明すること、(3)代表国の立場や考え方にそって決議案や修正案を書き、提出すること、(4)代表国の国益を念頭に討論を行うことです。

モデルUNは、ニューヨークで行われる様に、いくつかの学校の生徒が参加する大きなスケールでも行われますし、自校の生徒のみ、あるいはクラブのメンバーのみという小さなスケールでも行うこともできます。MUNのいい点は、学生達のニーズに合わせて、会議を行うことができることです。生徒と教師が共に協力しあってモデルUNにチャレンジしていくことによつてその場だけではなく、長期的に見ても、たいへん得られるものが大きいと言えます。モデルUNを行うことによつて、生徒は自分自身気づかなかつた、長所、能力、才能を見つけ出すことができます。また、お互いのパートナーや教師と密接に話し合つていく過程で相互に尊敬と信頼を深めることができます。

実際に教室でどのようにしてモデルUNを題材にし、授業を行うことができるか、その方法について京都西高校の国際文化コースの例を取り上げて説明したいと思います。

京都西高校は京都外国語大学の併設校で、全校の生徒は一二〇〇人ぐらいいます。本校には普通コース、特進コース、スポーツコース、そして国際文化コースとコースが四つあり、国際文化コースには全体で約一〇〇人の生徒がいます。

国際文化コース、略してICコースは外国語、特に英語の学習を通して様々な国の文化を学んでいくことを目的としてつくられたコースです。英語の授業は「Content-base」のアプローチを柱として行われます。「Content-base」というのは内容別にテーマを絞つて授業を行うことです。特に国際的に問題となっているトピックを中心に取上げて授業を行います。独自のカリキュラムを持つインターナショナルスクールとは違って、京都西のICコースは他の日本の高校と同じように文部省の教育方針にそつてカリキュラムを作っております。特に英語の運用能力を向上させることを目標にしております。しかし、この国際文化コースのユニークな特徴は、「Foreign Affairs」(外国事情)及び、「Comparative Cultures」(比較文化研究)の授業がすべて英語でなされている点です。この様に生徒の英語能力向上と同時に、世界の諸問題に対する意識を高めることをねらいとしてカリキュラムが編成されているわけですが、モデルUNもその一環として組み込まれています。

京都西高校では現在、三年生のみを対象に一二週間、模擬国連を集中的に勉強します。この期間、英語のReading, Writing, Listening, Speakingの授業すべてにおいて、また外国事情及び比較文化のクラスにおいても、国連とそれに関連のある議題に焦点をあてて授業を進めて行きます。モデルUNへの実際の準備は三年生を中心に行いますが、一年生、二年生において

も国連に関する授業を体験する機会が与えられます。例えば先月、京都西高校で国連による世界人権宣言をテーマにシンポジウムが開かれました。このシンポジウムでICコースの学生はホームルームごと全員、人権と国連について研究し、発表を行いました。また二年生は秋に一カ月間、アメリカのボストンにある三つの高校に短期留学します。最後の週、ワシントンD.C.とニューヨークの観光をしますが、ニューヨークでは事前に学習しておいた国連を必ず訪れます。このように京都西高校では、国連と世界の諸問題に焦点をあてたカリキュラムが、全学年を通して授業に組み込まれ、統合されています。

体験的教育方法として、生徒の世界の諸問題に対する意識を高めるため、そして英語の学習に役立てるため、私たちはモデルUNを用います。京都西高校で開かれる関西地区のモデルUNは、英語の母国話者によってでなく、英語を外国語として学んでいる日本人の高校生によって、すべてが英語で行われるという点においては、他に例のない、ユニークなイベントだと確信して言えます。京都西高校の他に昨年、インターナショナルハイスクール、大阪YMCAインターナショナルハイスクール、芦屋大学インターナショナルハイスクール、そして神戸市立葺合（ふきあい）高校がモデルUNに参加しました。

先程述べました様に、MUNは内容を重視した、言語学習に適した方法だと言えます。模擬国連会議参加への準備期間中はReading, Writing, Listening、そしてSpeakingなどの能力を養うクラスでは、議題に関するいろいろな調査と共に会議の進行手順についても学び、練習する機会が与えられます。外国事情、比較文化のクラスでも、同様に、国連や会議事項に関連のあるトピックを中心に取り上げます。そして、これらのクラスで生徒はスピーチ、討論、批評の仕方、問題解決策の見出し方、チームワークの育成及び情報分析などの技術を身につけることができます。

モデルUNでは、国連で議題となっている最近の世界問題を取り扱います。例を挙げますと京都モデルUNでは、一九九一年がパレスチナとイスラエル人のジレンマについて、また一九九二年にはリオデジャネイロの環境サミットで取り上げられた大気汚染をテーマに討論が進められました。ご存知の通り、先月、ウィーンで世界人権会議が開かれました。そこで私たちは今年のモデルUNのテーマとして「人権、その普遍性と文化性及び難民の権利」を選びました。毎年一月に開かれる京都模擬国連会議に向けて、普通、一学期が始まってから、すぐ準備

に取りかかります。まず最初にすることは、生徒の好みや知識に応じて様々な国の分担を決めることです。昨年、一九九二年にはオーストラリア、ブラジル、セネガル、イラクなど三六カ国の代表を参加者が演じました。この段階で行われるミーティングでは、参加する生徒と教師が一緒にモデルUNの会議事項、スケジュール及びルールについて話し合います。

第二段階は、議題に関する情報収集です。生徒は、自分たちが選んだ国の背景知識を得るため「State of the World」と呼ばれる国連の世界情勢に関する資料、各国政府の発行する出版物、あるいは、様々な参考資料を用いてリサーチを行います。また「Aegis」と呼ばれるコンピュータネットワークを使ってアメリカ政府の広報資料からいろいろな国に関する様々な統計を手に入れることができます。

夏の期間、生徒は情報を収集するため、自分の分担する国の大使館や総領事館に英語の手紙を出し、その国についての資料を請求します。結果は様々で、何も返答が得られない場合もあるし、リビア大使館のようにA四サイズの政府指導者の写真と詳しい政策マニュアルを送ってきた国もあります。手紙を書く場合には、モデルUNの趣旨を明確に示し、資料を送って頂いた国の大使館あるいは領事館には、お礼の手紙を書くことも忘れないようにしなければなりません。

また地域にある資料館、例えば京都では立命館大学の国連寄託図書館、そしてアメリカンセンター図書館などを利用して詳しい情報を集めることができます。そして、その年のモデルUNの議題事項と関連した活動を行っている機関からゲストスピーカーをクラスに招き、話を聞くことによって、問題となっている事項の理解をより深めていくことができます。国連広報センターも貴重な資料を提供してくれます。

生徒は、さらに自分たちでいろいろな情報収集の仕方を見つけていく必要があります。人権擁護団体のアムネスティ・インターナショナルや、グリーンピースなどのような国際機関や、政府、あるいは非政府機関(NGO)に連絡する方法もあります。昨年、ポーランドを代表した二人の生徒は、返事が返って来るかどうか分からないまま、ワルシャワの環境庁宛に手紙を書いたところ、ポーランドの環境問題についてたいへん役に立つ情報を載せたパンフレットを送ってもらうことができました。このようにして集められた資料だけでなく、生徒は日本に在住する外国人学生などに直接インタビューして意見を聞いて見るのも、おもしろいと思います。

このようにして集められた研究資料は、すべて自分たちで作る、モデルUNのファイルにまとめていくと大変便利です。ファイルには、会議のルールや進行手順及び、それぞれの国に関する情報、新聞雑誌の記事の切り抜き、そして決議案や他に必要と思われるすべての資料をファイルするとよいでしょう。

生徒たちで作り、運営していく委員会も、モデルUNの準備仮定において、欠かせないものとなります。例えばシミュレーション会議で代表する国に関する新聞や雑誌の記事を収集する委員会とか、二日間のイベントのあと催される親睦パーティーを開く委員会、または地方の新聞あるいはテレビ局に連絡を行う広報委員会など分担を決めて、これらの委員会を運営していく必要があります。

京都西高校では、モデルUNを授業の中に組み込んでいますが、形式にこだわる必要はなく、生徒のニーズと状況に合わせて柔軟にMUNを活用することができます。京都模擬国連会議でも、ある学校はESSクラブ活動の一環として参加しているところもあります。ニューヨークにあるモデルUNと、国連青年のプログラムのディレクターであるジェームス・モードン氏は最初は小さいスケールからMUNを始めざるをすすめています。彼はまた、もし国連加盟国一八四カ国のうち三分の二の代表国が参加できない場合には、総会のシミュレーションは開かないほうがよいでしょうと述べています。参加する生徒のニーズに応じて、最初は小さな委員会から始め、そして代表国が増えるにしたがい、安全保障理事会、次に経済社会理事会とシミュレーションを行っていくことができるようになります。

将来、モデルUNをクラスで利用したいけれども、なかなかやり方が分からないと、とまどっている先生方もいらっしゃると思いますが、その場合には、国連で製作した、「The Model United Nations」というビデオを見ると、大変参考になると思います。ビデオは一五分の短いもので、実際にニューヨーク、モスクワ、そしてワシントンD.C.で開催されたモデルUN模擬国連会議の様子が収録されています。また、もう少し詳しくモデルUNについて知りたいと言う方がいらっしゃいましたら、是非、京都西高校の私にご連絡下さい。私たちのプログラムで何かお役にたつことがありますたら、喜んでお話ししたいと思います。

今年の京都モデルUNは人権委員会の模擬会議を開催する予定です。興味のある方は加盟国の代表者として参加あるいはオブザーバーとして見学においでください。将来、より多くの日本の高校がモデルUN模擬国連を大小様々な形で授業やクラブ活動に取り入れ、生徒の英

語力の向上及び国際意識を高めるために、役立てることができたらよいと願っています。その意味で今日、ご紹介しました京都西高校のモデルUNに関する実践活動報告が、少しでも御参考になれば幸いです。

(文責・国連広報センター)

1994年1月

国際連合広報センター

東京都渋谷区神宮前5-53-70

国連大学ビル8階

〒150 電話(03)5467-4451